

Hiizamaru Anzai
安西水丸（イラストレーター）

南房総で少年期のほとんどをすごしている。クジラの解体は何度か見た。コキンコキンという骨を打つ音は今でも耳の奥にある。

Osamu Ikauchi
池内 紀（ドイツ文学者・エッセイスト）

沖で汐を吹いていたクジラが、どうして缶詰めや弁当のおかずになるのだろうか？ 幼いころの疑問が解けた。山を耕して美田をつくるのだ。

Katsuji Ebisawa
海老沢勝一（元NHK会長）

日本は島国であり、時には海と戦い、海と共生してきた。この写真集は、クジラと日本人のかかわりを真正面からとらえた貴重な記録だ。

Kuya Kato
加藤郁乎（俳人）

わたつみ割きて勇魚の月日かな

Tsuna Kaneko
金子兜太（俳人）

「古式捕鯨」と刻んだ柱が眼にしみた。岩壁のような巨鯨の肉体、それを解体する人間。生々しくも荘重な影像の重なりに格調がある。

Junichiro Kida
紀田順一郎（評論家）

むかしから変わらない日本の風土の中に、生きることの極点を真正面から見つめた画像の、ほとんど息をのむような力感に脱帽。

Taro Goto
五味太郎（絵本作家）

よい。とてもよい。鯨はよい。解体作業もよい。鯨肉もこれまたよい。まったく完璧だね。俺にもお裾分けしなさい。何か問題あるの？

Mikiko Sasaki
佐々木幹郎（詩人）

日本における鯨文化は縄文時代から始まっている。海の王者の巨大さの前で、人はいままも縄文人になる。生きる哀しみと祈りに満ちる。

Kenji Sano
佐野賢治（神奈川大学 日本常民文化研究所所長）

「殺生」、生きとし生けるものを殺して生きる、生かす。生き物が食べ物になるクジラとヒトの生殺与奪の真剣勝負、解体。命を「いただきます」の言葉が思わず浮かぶ…

Kenichi Sudo
須藤健一（国立民族学博物館長）

捕鯨を生業とする人びとは、適切で、再生可能なクジラ資源をいかす知と技をあみだした。本書はその豊かな捕鯨文化を今に伝えている。

Kenichi Tanigawa
谷川健一（民俗学者）

「クジラ解体」の上梓を心から祝福したい。海の王者クジラに人間が挑む壮絶な記録は、後世に残る「九十九里浜」からつづく小関与四郎氏の魂の叫びである。

Takeo Chii
地井武男（俳優）

小関さんの作品の全ては、戦後の日本人のみなざる「生命力」です。この「生命力」を記憶や記録にとどめておくだけで良いのか？ 我々に問いかけているのです。

Rokusaburo Michiba
道場六三郎（料理家）

日本人は、はるか昔からクジラを食料としてきました。自然の恵みの最大のご馳走と言っていいでしょう。そのことを深く考えさせられます。

Lehriki Yamamoto
山本一力（作家）

クジラ一頭で七浦が潤うという。血の一滴までも無駄にせず、仕留めたクジラの成仏を願う漁師。その真摯な姿が活写された、見事な写真集だ。